

## 序

本書『乳幼児の発達と保育―食べる・眠る・遊ぶ・繋がる―』の頁を開くと、そこには、このような本は過去に見たことがなかったと感じられる新たな世界が広がるだろう。そして子どもや子育てに関心を持つ読者の方には、乳幼児に関する最新の学術研究がこのように進んでいるのかという驚きや知的興味を感じていただけるに違いない。乳幼児の発達と保育の本は、長年にわたって数多く出版されてきている。それらは、発達心理学の教科書であったり、保育士・幼稚園教諭等の養成課程のためのテキストや参考書であったり、一般書や実践の方法書であったりする。

それに対して、本書には3つの特徴がある。第一は、「食べる・眠る・遊ぶ・繋がる」という副題に最もよく表れている。ヒトが人として生きていく根源的な行為に焦点をあてた本であり、その主体である子どもと子どもを支える養育者や保育者、行政、さらにそれらを新たな概念で捉えようとする研究者の繋がりが見える書として構成されている。それは、この本ができあがるまでの成り立ちや執筆陣によるものである。本書は、カバーにロゴマークが描かれている、東京大学大学院教育学研究科附属発達保育実践政策学センター (Cedep) のメンバーならびにその共同研究者や関係者による編集と執筆により作成されたものである。当該センターは2013年3月に、「発達保育実践政策学」という新学術領域の構築を目指して、日本学術会議第22期の大型研究計画マスタープランとして提出され、審議等を経て2015年7月にセンターが設置されることになった。乳幼児の子ども子育て保育等を学術として問う日本初の国立大学の機関である。乳児からの発達科学と乳幼児に対して行われる実践としての保育や子育て行為に関わる学問とその発達と子育て実践を支える児童福祉・教育の政策分野を貫く学術的研究を目標としたものである。個体発達とその環境を構成する人の関与の在り方とそのため社会構造や政策を、縦串をさすように考えることによって、ヒトが育つ生態環境としてのエコシステムを問うことができると考えられた。その時にその横串となって、センター設立当時からの鍵となる研究トピックが「食べる、眠る、遊ぶ」の人生最初期からの解明という活動であった。つまり、本書は、発達保育実践政策学という学術領域での研究の1つの具体的な成果として刊行されるものと位置付けることができよう。発達保育実践政策学という着想が縦系になり、「食べる、眠る、遊ぶ、繋がる」というヒトの本質に迫る営みの視点を横系とした編集を、

センター設立に寄与くださった、遠藤、渡辺、多賀の三氏がその意図を汲み取り構想してくださった。したがって第一の特徴としては、食べる、眠るなどそれぞれのトピックが重層的に語られることになっている。そしてさらにそこに「繋がる」という視点をいれることによって、子どもが育つ中にある社会の網の目としての繋がりが見えてくるようになっていく。多賀、渡辺両氏が当初本書を企画してくださった時の本書企画意図は以下である。『胎内環境から出生後環境へと生まれ出た後の乳幼児期は、脳神経系・筋骨格系・循環器系・代謝系等の生物としての身体の構造や機能が急速に発達する時期である。また、家庭内環境から保育施設等の社会的環境へと生活の場が移行し、双方の環境間の行き来を経験する時期でもある。そのような環境の中で、乳幼児は、「食べる」、「眠る」、「遊ぶ」といった3つの基本的な活動を、時空間を通じて積み重ねることにより、生物学的なヒトとして、また社会的な人として発達・成長していく。本書では、これらの基本的な活動を、保育学、発達科学、脳神経科学、政治経済学、工学、医学、保健学といった観点から科学的にとらえる。そして、それらの3つの活動を「繋げる」ことにより、日々の生活の中で「食べる」、「眠る」、「遊ぶ」といった3つの基本的な活動が相互に影響し合い、紡がれていく形を描き出すことを目指す。』

このためにセンターには4つの部門「発達基礎部門」「子育て・保育研究部門」「政策研究部門」「人材育成部門」があるが、それら4部門が総動員で執筆をしている。その企画に基づく醍醐味を楽しんでいただけたらと思う。

第二の特徴は、本書が完成品の定番となった知識を解説するテキストではなく、まさに研究やその発想を生み出していく過程での研究を紹介しているという意味で、最新の知見であると同時にオンゴーイングの進行中の研究内容を一般の方にわかるように紹介しているという点である。2015年のセンター設立の翌年の2016年に、創設に関わった者たちが、『あらゆる学問は保育につながる』（東京大学出版会）を出版した。まだその時点では、センターの独自の研究は実施され始めたばかりであり、それまでの研究やその領域で行われてきた研究をもとに議論をすることが行われた。そしてそれから4年あまりが経過し、センターが実際にどのような研究に取り組んできたのか、4年の中でいろいろ行われた研究が中心になって掲載されている。しかしながら、それだけでは限られたスタッフで書き込めていない内容部分の章を、教育学研究科の教員や共同研究の先生方が支え書いてくださった。そしてそれもまたできたてほやほやのホットな内容が書かれている。その意味で、乳幼児期の研究がダイナミックに動きながら進んでいる息吹を本書から感じ取っていただけたら幸いである。また読者の関心によって、どの章、どの節からでも読めるようにそれぞれの内容は独立している。

そして第三の特徴は、目次からは見えにくいですが、各節のはじまりには2つの問いが置かれ、その2つの問いに答えるように構成されている点である。たとえば、第1章の4つの節では、第1節「保育者は、園での食事について、何を大切に考えているのでしょうか」「保育者は、園での食事について、どのような難しさを感じているのでしょうか」、第2節「家庭では、どのような子どもの食事の準備・提供がなされているのでしょうか」「家庭では、食べることについて、どのような規範があるのでしょうか」、第3節「子どもにいつ何を食べさせたら良いのでしょうか」「子どもの食物に関して注意すべきことは何でしょうか」、第4節「食べ物はどのようにして自分の身体の一部になるのでしょうか」「腸内細菌の働きと脳の活動にはどのような関係があるのでしょうか」と書かれている。日頃食べることについて当たり前と思っている人もおられれば、子育てで困っている人もおられるだろう。誰もが持つ問いに対して、研究者はどのように問うのか、どんな考え方や概念からそのことを問うているのかが見えるのが本書の特徴である。研究においては質の良い問いが研究内容の質を決める。その意味では、本書は子育てのノウハウ本としてこうやってよいということを直接指南する本ではない。しかし、現在どのような状態がなぜ起こっているのか。そこにはどのようなメカニズムや、やりとりがいろいろなレベルでなされているのかということを観ることができよう。本書には発生や発達の基礎がきちんと書き込まれていると同時に、子どもたちの発達に専門的に関わる人の仕事もまた見えるようになっていく。

上記本書の3つの特徴を意識して、本書を読んでいってくださると、それぞれの研究者のスタンスも見えてくるし、乳幼児に関わる多様な研究が見えてくるだろう。

子どもの数が年々減少しているのは、日本だけではなく先進諸国全体の特徴となっており、先進諸国の大半が人口を維持するのに必要な出生率2.0を割り込む形となっている。しかも現在その半数以上が都市に集中し、人口過密化地域と過疎化地域での多様な課題が生じてきている。デジタル化やグローバル化をはじめ、子どもを取り巻く社会文化的な環境は大きく変化してきている。子どもは社会の宝であり、そしてまた社会の鏡でもある。

第2章においては「眠る」ということが論じられている。日本の子どもの睡眠時間が世界で一番短いというデータはよく知られるところであるが、それはまた大人、子どもに関わる人の生活や生き方が反映しているということもできるだろう。それはいつからなのか、こうした問いが第2章で問われる。そして、第3章で取り上げたように子どもたちは、「見る」「聴く」「探る」「泣く」という行為によって他者と対話し、外界に自ら関わりながら学び成長していく。そしてその子

ども達を繋ぐためには、第4章で示しているように子どもを取り巻く、さまざまな絆の繋がりが求められている。人の環の断絶をどのように繋いでいくのか、そこには対人的な環と同時に社会での政策的な専門家による繋がりや、技術的に見えないものを見えるようにする環によって、より良い子育て環境をつくるのが求められよう。

本書は、実証的な検証に基づく自然科学、社会科学の研究者たちの執筆によるものである。残念ながら人文科学的視点から、子どもの食べる、眠る、遊ぶ権利をいかに保障できているのか、いくべきなのかという価値や哲学的な思索を論じた章は含まれていない。だからこそ、読者の皆様それぞれが、少子化時代に、多様な生物が共生するような持続可能な環境をどのようにつくるのか、そのために日々の保育や養育の中で何が大事なのかを考えながら、読んでいただけるとよいかもしれない。子どもの生を考えることは、人がどのように生きるのかを問うことに繋がり、そしてどのような社会を形成するのかを問うこと、どのように行動するかを問うことにも繋がるだろう。日々の保育や子育ての中では、見えないものは、見過ごされ忘れがちであるだろう。そして自明への埋没が生まれる。しかしその中で本書との出会いが、すでに自明になっている日々の営みや人が行っている営みの持つ意味を改めて考えたり、それらを見つめたりするための眼差しを持つ1つのきっかけになったら幸いである。

本書の問いは、ネバーエンディングであり、オープンな問いである。ぜひその対話の環に読者の皆様も加わってくださったら、監修の役目をもつ者としてうれしく思う。

本書の出版企画・編集においては、朝倉書店編集部には、大変お世話になった。心から謝意を表したい。また本書刊行前に赤ちゃん学の可能性という視点から、教育学研究科という同じ職場にいなながらもそれぞれ別々に研究をしていた研究者たちを繋いでくださった、同志社大学赤ちゃん学研究センター小西行郎教授、執筆者には含まれていないがCedepの研究事業をいつも支えてくれているセンター事務の斉藤美穂さん、森山博樹さん、また事務補佐や研究補佐の皆様、またCedepの調査実験研究に協力して下さっている多くの園、保育者、保護者の皆さまにも心からの御礼を申し上げたい。

2019年7月

監修者

秋田 喜代美